

美男子と煙草

太宰治

青空文庫

私は、独りひとりで、きょうまでたたかつて来たつもりですが、何だかどうにも負けそうで、心細くてたまらなくなりました。けれども、まさか、いままで軽蔑けいべつしつづけて来た者たちに、どうか仲間に入れて下さい、私が悪うございました、と今さら頼む事も出来ません。私は、やつぱり独りで、下等な酒など飲みながら、私のたたかいを、たたかい続けるよりほか無いんです。

私のたたかい。それは、一言で言えば、古いものとのたたかいでした。ありきたりの気取りに対するたたかいです。見えすいたお体ていさい裁さいに対するたたかいです。ケチくさい事、ケチくさい者へのたたかいです。

私は、エホバにだつて誓つて言えます。私は、そのたたかいの為に、自分の持ち物全部を失いました。そうして、やはり私は独りで、いつも酒を飲まずには居られない気持で、そうして、どうやら、負けそうになって来ました。

古い者は、意地が悪い。何のかのと、陳腐ちんぷきわまる文学論だか、芸術論だか、恥かしげも無く並べやがって、以もつて新しい必死の発芽を踏みにじり、しかも、その自分の罪惡に向お気づきになつておられない様子なんだから、恐れいります。押せども、ひけども、動き

やしません。ただもう、命が惜しくて、金が惜しくて、そうして、出世して妻子をよろこばせたくて、そのために徒党を組んで、やたらと仲間ほめして、所謂一致団結して孤影の者をいじめます。

私は、負けそうになりました。

先日、或るところで、下等な酒を飲んでいたら、そこへ年寄りの文学者が三人はいつて来て、私とそのひとたちとは知合いでも何でも無いのに、いきなり私を取りかこみ、ひどくだらしない酔い方をして、私の小説に就いて全く見当ちがいの悪口を言うのでした。私は、いくら酒を飲んでも、乱れるのは大きらいのたちですから、その悪口も笑って聞き流していましたが、家へ帰って、おそい夕ごはんを食べながら、あまり口惜しくて、ぐしやと嗚咽が出て、とまらなくなり、お茶碗も箸も、手放して、おいおい男泣きに泣いてしまつて、お給仕していた女房に向い、

「ひとが、ひとが、こんな、いのちがけで必死で書いているのに、みんなが、軽いなぶりものにして、……あのひとたちは、先輩なんだ、僕より十も二十も上なんだ、それでいて、みんな力を合せて、僕を否定しようとしていて、……卑怯だよ、ずるいよ、……もう、いい、僕だつてもう遠慮しない、先輩の悪口を公然と言う、たたかう、……あんまり、ひ

「どいよ。」

などと、とりとめの無い事をつぶやきながら、いよいよ烈はげしく泣いて、女房は呆あきれた顔をして、

「おやすみなさい、ね。」

と言い、私を寢床に連れて行きましたが、寝てからも、そのくやし泣きの嗚咽が、なかなか、とまりませんでした。

ああ、生きて行くという事は、いやな事だ。殊ことにも、男は、つらくて、哀かなしいものだ。とにかく、何でもたたかつて、そうして、勝たなければならぬのですから。

その、くやし泣きに泣いた日から、数日後、或る雑誌社の、若い記者が来て、私に向い、妙な事を言いました。

「上野の浮浪者を見に行きませんか？」

「浮浪者？」

「ええ、一緒に写真をとりたいのです。」

「僕が、浮浪者と一緒の？」

「そうです。」

と答えて、落ちついています。

なぜ、特に私を選んだのでしょうか。太宰といえ、浮浪者。浮浪者といえ、太宰。何かそのような因果関係でもあるのでしょうか。

「参ります。」

私は、泣きべその気持の時に、かえつて反射的に相手に立向う性癖を持っているようです。

私はすぐ立つて背広に着換え、私の方から、その若い記者をせき立てるようになって家を出ました。

冬の寒い朝でした。私はハンカチで水^{みず}漬^{ばな}を押えながら、無言で歩いて、さすがに浮かぬ心地^{こころち}でした。

三鷹^{みたか}駅^かから省線^かで東京駅^{まで}迄行き、それから市電に乗換え、その若い記者に案内されて、^ま先ず本社に立寄り、応接間に通されて、そうして早速ウイスキーの饗応にあずかりました。

思うに、太宰はあれは小心者だから、ウイスキーでも飲ませて少し元気をつけさせなければ、浮浪者とろくに対談も出来ないに違いないという本社編輯部^{へんしゅうぶ}の好意ある取計らいであったのかも知れませんが、率直に言いますと、そのウイスキーは甚^{はなは}だ奇怪なしろもの

でありました。私も、これまでさまざまの怪しい酒を飲んで来た男で、何も決して上品ぶるわけではありませんが、しかし、ウイスキーの独り酒というのは初めてでした。ハイカラなレットルなど貼^はられ、ちゃんとした瓶^{びん}でしたが、内容が濁っているのです。ウイスキーのドブロクとでも言いましょうか。

けれども私はそれを飲みました。グイグイ飲みました。そうして、応接間に集って来ていた記者たちにも、飲みませんか、と言ってすすめました。しかし、皆うす笑いして飲まないのです。そこに集って来ていた記者たちは、たいていひどいお酒飲みなのを私は噂^{うわさ}で聞いて知っているのです。けれども、飲まないのです。さすがの酒豪たちも、ウイスキーのドブロクは敬遠の様子でした。

私だけが酔っぱらい、

「なんだい、君たちは失敬じゃあないか。てめえたちが飲めない程の珍妙なウイスキーを、客にすすめるとは、ひどいじゃないか。」

と笑いながら言つて、記者たちは、もうそろそろ太宰も酔つて来た、この勢いの消えないうちに、浮浪者と対面させなければならぬと、いわばチャンス逃さず、私を自動車に乗せ、上野駅に連れて行き、浮浪者の巢と言われる地下道へ導くのでした。

けれども、記者たちのこの用意周到の計画も、あまり成功とは言えないようでした。私は、地下道へ降りて何も見ずに、ただ真直まっすぐに歩いて、そうして地下道の出口近くになって、焼鳥屋の前で、四人の少年が煙草を吸っているのを見掛け、ひどく嫌いやな気がして近寄り、「煙草は、よし給たまえ。煙草を吸うとかえっておなかが空すくものだ。よし給え。焼鳥が喰くいたいなら、買ってやる。」

少年たちは、吸い掛けの煙草を素直に捨てました。すべて拾歳前後の、ほんの子供なのです。私は焼鳥屋のおかみに向い、

「おい、この子たちに一本ずつ。」

と言い、実に、へんな情なさを感じました。

これでも、善行という事になるのだろうか、たまらねえ。私は唐突にヴァレリーの或ある言葉を思い出し、さらに、たまらなくなりました。

もし、私のその時の行いが俗物どもから、多少でも優しい仕草と見られたとしたら、私はヴァレリーにどんなに軽蔑されても致し方なかつたんです。

ヴァレリーの言葉、——善をなす場合には、いつも詫わびながらしなければいけない。善ほど他人を傷きずけるものはないのだから。

私は風邪をひいたような気持になり、背中を丸め、大股で地下道の外に出てしまいました。

四五人の記者たちが、私の後を追いかけて来て、

「どうでした。まるで地獄でしょう。」

別の一人が、

「とにかく、別世界だからな。」

また別の一人が、

「驚いたでしょう？ 御感想は？」

私は声を出して笑いました。

「地獄？ まさか。僕は少しも驚きませんでした。」

そう言つて上野公園の方に歩いて行き、私は少しずつおしゃべりになつて行きました。

「実は、僕なんにも見て来なかつたんです。自分自身の苦しきばかり考えて、ただ真直を見て、地下道を急いで通り抜けただけなんです。でも、君たちが特に僕を選んで地下道を見せた理由は、判つた。それはね、僕が美男子であるという理由からに違いない。」

みんな大笑いしました。

「いや、冗談じゃない。君たちには気がつかなかったかね。僕は、真直を見て歩いていても、あの薄暗い隅すみに寝そべっている浮浪者の殆ど全部が、端正な顔立をした美男子ばかりだということを発見したんだ。つまり、美男子は地下道生活におちる可能性を多分に持っているということになる。君なんか色が白くて美男子だから、危いぞ、気をつけ給え。僕も、気をつけるがね。」

また、みんながどつと笑いました。

自惚うぬぼれて、自惚れて、人がなんと云つても自惚れて、ふと気がいたらわが身は、地下道の隅に横たわり、もはや人間でなくなっているのです。私は、地下道を素通りしただけで、そのような戦せんりつ慄を、本気に感じたのでした。

「美男子の件はとに角、そのほかに何か発見出来ましたか。」

と問われて私は、

「煙草です。あの美男子たちは、酒に酔っているようにも見えなかったが、煙草だけはたいてい吸っていましたね。煙草だつて、安かないんだらう。煙草をかうお金があつたら、莖むしろ一枚でも、下駄げた一足でも買えるんじゃないかしら。コンクリートの上にじかに寝て、はだしで、そうして煙草をふかしている。人間は、いや、いまの人間は、どん底に落ちて、は

丸裸になつても、煙草を吸わなければならぬように出来ているのだろうね。ひとごとじゃない。どうも、僕にもそんな気持が思い当らぬこともない。いよいよこれは、僕の地下道行きは実現性の色を増して来たようだわい。」

上野公園前の広場に出ました。さっきの四名の少年が冬の真昼の陽射ひざしを浴びて、それぞれ嬉々として遊びたわむれていました。私は自然に、その少年たちの方にふらふら近寄つてしまいました。

「そのまま、そのまま。」

ひとりの記者がカメラを私たちの方に向けて叫び、パチリと写真をうつしました。

「こんどは、笑つて！」

その記者が、レンズを覗のぞきながら、またそう叫び、少年のひとりには、私の顔を見て、

「顔を見合せると、つい笑つてしまうものだなあ。」

と言つて笑い、私もつられて笑いました。

天使が空を舞い、神の思おぼしめし召めにより、翼が消え失せ、落ら下っ傘かさのように世界中の処々方々に舞い降りるのです。私は北国の雪の上に舞い降り、君は南国の蜜柑畑みかんばたけに舞い降り、そうして、この少年たちは上野公園に舞い降りた、ただそれだけの違いなのだ、これから

どんどん生長しても、少年たちよ、容貌には必ず無関心に、煙草を吸わず、お酒もおまつり以外には飲まず、そうして、内気でちよつとおしゃれな娘さんに気永に惚れなさい。

附記

この時うつした写真を、あとで記者が持つて来てくれた。笑い合っている写真と、それからもう一枚は、私が浮浪児たちの前にしゃがんで、ひとりの浮浪児の足をつかんでいる甚だ妙なポーズの写真であった。もしこれが後日、何か雑誌にでも掲載された場合、太宰はキザな奴だ、キリスト気取りで、あのヨハネ伝の弟子の足を洗ってやる仕事を真似していやがる、げえつ、というような誤解を招くおそれなしとしないので一言弁明するが、私はただはだして歩いている子供の足の裏がどんなになっているのだろうという好奇心だけであんな恰好をしただけだ。

さらに一つ、笑い話を付け加えよう。その二枚の写真が届けられた時、私は女房を呼び、「これが、上野の浮浪者だ。」

と教えてやったら、女房は真面目に、

「はあ、これが浮浪者ですか。」

と言い、つくづく写真を見ていたが、ふと私はその女房の見詰めている個所を見て驚き、「お前は、何を感じ違いして見ているのだ。それは、おれだよ。お前の亭主じゃないか。浮浪者は、そっちの方だ。」

女房は生真面目過ぎる程の性格の所有者で、冗談など言える女ではないのである。本気に私の姿を浮浪者のそれと見誤ったらしい。

青空文庫情報

底本：「太宰治全集9」ちくま文庫、筑摩書房

1989（平成元）年5月30日第1刷発行

1998（平成10）年6月15日第5刷発行

底本の親本：「筑摩全集類聚版太宰治全集」筑摩書房

1975（昭和50）年6月～1976（昭和51）年6月発行

入力：柴田卓治

校正：かとうかおり

2000年1月23日公開

2004年3月4日修正

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www.aozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

美男子と煙草

太宰治

2020年 7月17日 初版

奥 付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
<http://tokimi.sylphid.jp/>